

頭への汽車の時刻も迫り来れば、心ゆかずも、もと来し道に車かへしぬ。

和田博士の「豊州天徳軍の位置について」(史林第十六卷第二號)の中に、錢良擇の出塞紀略を引き、その敘述の精彩に富み、宛然目に睹る如きを賞揚せられたるは同感なり。たゞ此の間にも記述の精を缺く點少からねど、最も怪しむべきは、文中に塔の形を六角といへることなり。余が八角と記憶したることの誤ならざるかを疑ひ、村田博士にも質したるに、明らかに八角なりといひ、寫眞につきて見るも疑ふべきなし。目睹する如きまでに書かれたる記事にもかゝる大なる誤あることを注意せざるべからず。此の塔の創建の何時に在るべきかは、紀略の言ふ如く明らかならねど、全體の調子、別けても牡丹の裝飾が遼代のそれと全く同一様式なることなどを思ひ合せて、余はこれを遼代の創建と考ふるなり。

紀略に第一級壁間に石碑八座有りと見ゆるは、その後に至りて持ち去られたるものなるべきか、蒙古兵をして捜さしめたるも、何物もなしと報告せり。たゞ第七級には東壁に大書して、「大金大定二年奉勅重修」と記し、更に壁端に題署して、豊州在城塔云々の文字ありと記せるは、今もなほその儘に存するならんか。第一級のは石碑なれば持ち出されて失はれたるなるべしと思はるれど、第七級のは壁面に大書したりといへば、持ち去らるべくもあらず。この日平地に於ても身を支へ難きまでの強風となりしかば、塔の最高層までは蒙古の兵も登り得ず、登らざりしとは言ひかねて、何物もなしと告げたるらんかと疑はる。かく疑ふは、北京に歸りて後今綏遠地志の編述に従へる傅沅叔老友と語り合ひける時、氏も此の塔中に、元明人の題せる墨蹟十餘段あること、また塔が元時の亂に人民の避難所となりしことあるを告げたるに由る。民の避難したることもこの題記